



小田原文学館

生誕 130 年記念交流特別展

# 北原白秋 —詩人の見た風景—

平成 28 年 1 月 23 日 (土) ~ 3 月 16 日 (水)

## 「あいさつ」

詩人であり、童謡作家であり、そして歌人である北原白秋。

その白秋は、はるか西の九州、柳川の城下町に隣接する沖端<sup>おきのはた</sup>で生まれ育ち、文学に目覚めました。東京では浪漫派の詩人・歌人として「明星」で頭角を現しますが、苦悩と困窮のなかで転機を求める三崎・小笠原・葛飾時代を経て、大正時代にはこの小田原の町で、まさしく赤い不死鳥のように再生を遂げたのです。昭和に入る頃に東京へ戻り、詩人としてさらなる名声を得ながらも、白秋は「多磨」で短歌に力を注いでいきました。

柳川、東京、三崎、小笠原、葛飾、小田原、そしてふたたび東京……。このように、住まう土地ごとに、白秋はさまざまな姿を見せたのです。

平成二十七年は、白秋生誕百三十年であり、柳川市、三浦市でも記念事業が開催されました。小田原文学館では、ゆかりの都市との縁を生かし交流特別展「北原白秋―詩人の見た風景―」を開催し、白秋の人生と業績をたどります。

最後になりますが、特別展の開催にあたり貴重な資料をご出品いただき、様々なご支援を賜りました、白秋ゆかりの柳川市・柳川市教育委員会、北原白秋生家・記念館、三浦市・三浦市教育委員会など、多くの関係者および団体各位に深く感謝いたします。

平成二十八年一月

小田原文学館

## 凡例

1. この小冊子は、2016（平成28）年1月23日（土）～3月16日（水）を会期として小田原文学館で開催する同名展示の解説書です。
2. 本冊子の編集及び執筆は、小田原市立図書館学芸員 鳥居紗也子が行いました。（一部を除く）
3. 作品本文の引用は『白秋全集』（岩波書店版）を基本とし、引用の際に新字体に改めた箇所があるとともに、ルビ、傍点、敬称等は適宜省略しました。また、難読と思われる漢字にルビを付した箇所があります。
4. 今日の社会通念に照らして不適切と思われる表現や用語が使用されている箇所がありますが、原文を尊重し、そのままとしました。
5. 展示内容と本冊子の掲載内容・資料番号等は異なる場合があります。

## 資料解説

# 第1章 誕生——柳川

北原白秋は本名を隆吉といい、明治18年(1885)1月25日、福岡県山門郡沖端村(現柳川市)の北原家に父長太郎と母しげ(通称しげ)の長男として生まれました。

家はもともと海産物問屋として九州一帯に知られていましたが、長太郎の代に酒造を業とするにいたしました。

地元は水郷として知られ、切支丹や南方文化が早くに流入したところでもあったので、一種の異国情調豊かな雰囲気をかもし出していました。隆吉少年は、そうした豊かな環境の中で多感な幼少期を過ごしました。

本章では、「トンカ・ジョン」(良家の長男)として大切に育てられ、文学に目覚めた時期でもある、故郷の柳川時代をご紹介します。

### 1. 北原白秋生家写真(現在の様子)

白秋の生家、北原家は代々柳河藩御用達の海産物問屋で、「油屋」または「古問屋」の屋号で知られていたが、祖父の代から酒造業を兼ね、父の代ではそれが本業となった。白秋が生まれる前に兄が亡くなったため、柳川の方言で良家の長男を意味する「トンカ・ジョン」と呼ばれ、何不自由なく育てられた。現在、生家の建物は白秋の記念館として公開されている。

### 2. 矢留尋常小学校時代 明治27、28年(1894、95)

写真提供 北原白秋記念館

明治24年、白秋は地元の矢留尋常小学校に入学した。当時の校舎は、白秋の祖父の寄贈によるものであった。利発な少年で成績も良く、明治28年に首席で卒業した。

### 3. 家族の写真 昭和15年(1940)7月24日

当館蔵

晩年、阿佐ヶ谷の白秋宅前で撮影されたもの。前列左より父長太郎、母しげ、白秋。後列左より妻菊子、長女篁子。

### 4. 伝習館中学4年生の頃 明治35年(1902)

写真提供 北原白秋記念館

柳河高等小学校を2年で修了した白秋は、明治30年、2年飛び級で県立中学伝習館に入学した。この写真は、国語教師の転任にあたり送別の記念として撮影されたもの。2列目右端が白秋、左端が親友の中島鎮夫(白雨)。

私の郷里柳河は水郷である。さうして静かな廃市の

一つである。自然の風物は如何にも南国的であるが、既に柳河の街を貫通する数知れぬ溝渠ほかわちのほひには日に日に廃れてゆく旧い封建時代の白壁が今なほ懐かしい影を映す。肥後路より、或は久留米路より、或は佐賀より筑後川の流を超えて、わが街に入り来る旅びとはその周囲の大平野に分岐して、遠く近く瓏銀の光を放つてゐる幾多の人工的河水を眼にするであらう。さうして歩むにつれて、その水面の随所に、菱の葉、蓮、真菰、河骨、或は赤褐黄緑その他様々の浮藻の強烈な更紗模様もようのなかに微かに淡紫のウオタアヒヤシンスの花を見出すであらう。「中略」水郷柳河はさながら水に浮いた灰色の柩である。

——「わが生ひたち」2

『思ひ出』



5. 『思ひ出』 東雲堂書店 明治44年(1911) 6月

当館蔵

第二詩集。表紙は白地で、左上部にランプのダイヤの女王を色刷りで印刷し、その下にローマ字で「O・M O・I・D E」と題名が記されている。装丁をはじめ、挿絵などもすべて白秋が手がけた。収録されている詩の創作時期は明治42年秋から44年はじめまでで、序文は郷土の風物、生家などを中心に幼少時の生活について新鮮な散文体で綴っている。この詩集は好評で、版元の東雲堂書店によって何回も増刷が繰り返された。

6. 『若菜集』 春陽堂 明治30年(1897) 8月

神奈川県立図書館

島崎藤村の第一詩集。日本で最初の近代詩集とされる。清純で情熱的な詩風は多くの読者を魅了し、少年時代の白秋も魅了された一人だった。明治34年、沖端一帯で大火が起り、白秋の生家も類焼し酒蔵などが焼けたが、その時運び出された家財の中にこの『若菜集』があった。焼失をまぬがれた詩集のページが風に吹かれてなびいている様子は、白秋の記憶に鮮明に焼き付けられた。

7. 「虹」 「福岡日日新聞」明治35年(1902) 6月3日

原本所蔵 国会図書館

現在判明している白秋短歌作品で最初のものとなる「虹」が掲載された。此儘に空に消えむの我世ともかくてあれなの虹美しき

8. 雑誌「文庫」21巻3号 明治35年(1902) 10月1日

原本所蔵 日本近代文学館

少年向け雑誌「少年園」(明治21年創刊)から分かれて創刊されたのが、散文や和歌などの投書を主とした雑誌「少年文庫」で、「文庫」はその後身として発刊された。青少年の投書雑誌という性格を明確に打ち出し、河合醉茗、島木赤彦、伊良子清白がここから巣立っていった。

この号に投稿した白秋の短歌1首が、服部躬治の選で掲載されている。これが中央の歌壇への初登場であった。以後、同誌の歌壇で活躍し、明治37年1月までに11回、合計181首が掲載されている。

9. 「恋の絵がみ」

同人回覧雑誌「常盤木」3集掲載 明治36年(年月日記載なし)

現在発見されている白秋の詩作品で最初のもの。

10. 『みだれ髪』 東京新詩社 明治34年(1901)

当館蔵 複製版

白秋も参加した「明星」派の詩人、与謝野晶子の第一歌集。鉄幹(寛)との恋から生まれたこの集は、人間性の肯定と恋愛賛美を情熱的に歌い上げ、短歌近代化の道を開いた歌集と位置づけられる。大きな反響を呼んだこの歌集を、白秋も夢中になって読んだという。

私が十六の時、沖ノ端に大火があつた。さうしてなつかしい多くの酒倉も、あらゆる桶に新しい金いろの日本酒を満たしたまま真蒼に炎上した。白い鷺のゐた潜水、周囲の清らかな堀割、泉水すべてが酒となつて、なほ寒い早春の日光に泡立つては消防の刺子姿の朱線に反射した。無数の小さい河魚は酔っぱらつて浮き上り、酒の流れに口をつけて飲んだ人は泥酔して僅に焼け残つた母屋に転がり込み、金箔の古ぼけた大きな仏壇の扉を剥がしたり歌つたり踊つたりした。私は恰度そのとき、魚市場に上荷げてあつた蓋もない黒砂糖の桶に腰をかけて、運び出された家財のなかにたゞひとつ泥にまみれ表紙もちぎれて風の吹くままにヒラヒラと顛へてゐた紫色の若菜集をしみじみと目に涙を溜めて何時までも何時までも凝視めてゐたことをよく覚えてゐる。

——「わが生ひたち」10 『思ひ出』



1-6

11. 水郷柳河写真集『水の構図』 初版 昭和18年 アルス

当館蔵

写真家の田中善徳との共著として出された、故郷柳川の写真集。はしがきとあとがきを白秋が担当したが、執筆中に病没したため、あとがきが未完のまま掲載された。白秋逝去の翌年にアルスから刊行された。

12. 二万分一地形図 久留米及佐賀近傍 18号

明治35年(1902) 12月 大日本帝国陸軍陸地測量部発行

写真提供 柳川市教育委員会

明治33年に帝国陸軍が測量した沖端周辺の地図。

13. 柳川城下絵図・沖端南部

おきのはた

江戸時代 九州大学附属図書館付設記録資料館

写真提供 柳川古文書館

地方有数の商家であった北原家付近の地図。

## 第2章 上京——東京

明治37年(1904)、白秋は上京し早稲田大学英文科予科に入学。同級の若山牧水らと親交を深め、授業より図書館によく通いました。

翌38年(1905)に「早稲田学報」の懸賞に応募した長詩が第一位となり、詩壇の注目を集めます。まもなく学校を中退、与謝野寛のすすめで新詩社に入り、詩や短歌を発表しました。この頃、寛・晶子夫妻、吉井勇、木下杢太郎らと知り合い、森鷗外、上田敏、蒲原有明らに才能を認められました。

明治40年(1907)夏には、杢太郎らと島原、天草などを巡遊。そこで身につけた切支丹趣味を採り入れた詩集『邪宗門』で、新しい象徴詩風を開きました。

本章では、故郷を出て本格的に文学活動を始めた時期の白秋をご紹介します。

1. 早稲田大学高等予科講堂 明治38年(1905) 1月

写真提供 早稲田大学大学史資料センター  
白秋が在籍していた頃の早稲田大学高等予科の講堂。

2. 早稲田大学構内全景 明治37年(1904) 1月

写真提供 早稲田大学大学史資料センター  
早稲田大学構内の全景。白秋が入学した年に撮影されたもの。



2-1

◇アルス ARS

白秋の実弟北原鉄雄が大正6年(1918)に設立した、芸術・文学を専門とする出版社。ラテン語で「芸術」の意。白秋の著作の大半はここから出版された。



1-11



1-10

3. 竣工なった図書館閲覧室 明治35年(1902)

写真提供 早稲田大学大学史資料センター  
大学在学中、白秋は図書館によく通っていたという。

4. 坪内逍遙肖像 昭和2年(1927)

国立国会図書館「近代日本人の肖像」より転載  
早稲田大学最終講義当日に撮影されたもの。白秋は在学中、図書館に入りびたつてほとんど授業に出席しなかったが、逍遙のシエークスピアの授業だけは出ていたという。

5. 若山牧水年賀状 大正7年(1918) 1月1日

当館蔵  
若山牧水は早稲田大学での白秋の同級生。二人は意気投合し、牛込の清致館という下宿に同宿した。当時の白秋は射水という雅号を使っており、同じく同級生の中林蘇水、牧水の3人は早稲田の「三水」と称された。

6. H・C・アンデルセン著、森林太郎訳『即興詩人』上巻

春陽堂 明治35年(1902) 9月号 神奈川県立図書館  
約9年を費やして完成した森林太郎(鷗外)による翻訳作品。すぐれた文才をもち、原作以上の出来栄へと評されたこの作は、早稲田大学時代の白秋の愛読書だった。

7. 上田敏『海潮音』 本郷書院 明治38年(1905) 10月

当館蔵 復刻版  
日本に象徴詩を紹介し、詩壇の風潮を一変させたと言われる上田敏の訳詩集。『即興詩人』同様、白秋はこの本を愛読した。

8. 「全都覚醒賦」 「早稲田学報」 明治38年(1905) 1月1日

原本所蔵 国立国会図書館  
現在は早稲田大学の校友会の発行誌となっているが、当時は早大の前身である東京専門学校の関係者が、法、経、文の問題を研究するために組織した「早稲田学会」発行の評論雑誌、交友誌。明治38年、白秋が「懸賞美文」に応募した本作が一等入選し、雑誌「文庫」にも同時掲載された。署名は「北原隆吉(射水)」となっている。

9. 白仁勝衛宛書簡 明治39年(1906) 6月5日

原本所蔵 北原白秋記念館  
白仁勝衛はペンネームを秋津といい、9歳年少の白秋は少年時代から兄事し、文学的に大きな影響を受けたという。白秋はこの書簡で、「白雨なくなり候のちはひとりにてさびしく候」と2年前に白秋宛の遺書を残して自死した親友中島



2-7



2-6



2-3

鎮夫（白雨）にふれ、孤独を訴えている。

参考資料 五足の靴行程表

明治40年、白秋は与謝野寛（鉄幹）、木下李太郎、吉井勇、平野万里とともに九州の旅に出ている。一行は東京を出発し、厳島や福岡をまわり、白秋の故郷である柳川も訪れた。この旅の紀行文を、「五足の靴」と題して5人がリレー形式で「東京二六新聞」に連載している。さらに、佐世保、平戸、長崎、天草などを巡遊する中で白秋らは切支丹遺跡を訪ねており、この経験は『邪宗門』に代表される南蛮文学的な作風、後に「邪宗門新派体」と称した退廃的な象徴詩に結実することとなる。

10・白仁勝衛宛書簡 明治40年（1907）6月2日

原本所蔵 北原白秋記念館  
風邪が治つたら与謝野寛を訪ねるつもりだと述べている。

11・白仁勝衛宛書簡 明治40年（1907）7月13日

原本所蔵 北原白秋記念館  
「五足の靴」の行程が変更になったことを細かく報告している。

12・五人づれ「五足の靴」

「東京二六新聞」 明治40年（1907）8月7日  
原本所蔵 国立国会図書館

「五足の靴」連載の初回。この連載は無署名で掲載された。「五足の靴が五個の人間を選んで東京を出た。五個の人間は皆ふわふわとして落着かぬ仲間だ。〔後略〕』という序文で始まり、厳島を訪れた様子が紹介される。

13・五人づれ「五足の靴」

「東京二六新聞」 明治40年（1907）9月3日  
原本所蔵 国立国会図書館

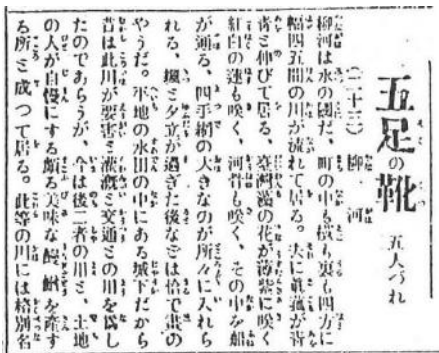
「五足の靴」連載第23回目は「柳河」（柳川のこと）を訪れている。文中の「H生」は白秋を指す。

14・美術雑誌「方寸」3巻第2号 明治42年（1909）2月

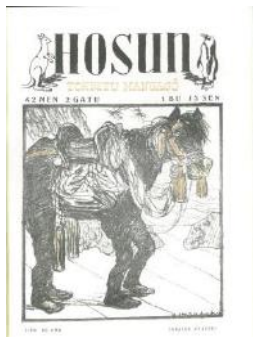
原本所蔵 日本近代文学館  
「方寸」は、創刊時から順に、石井柏亭、森田恒友、倉田白羊が編集発行人を務めた美術文芸雑誌。この号は「TOKBETU MANGAGO」（特別漫画号）として白秋の「Sora ni Makka na」（空に真赤な）が挿絵とともに掲載された。

15・野田宇太郎『パンの会』六興出版社 昭和24年（1949）

個人蔵  
野田宇太郎による「パンの会」の文学的位置づけや、当時の回想が綴られる。副題は「近代文芸青春史研究」。「パンの会」は、明治末期に起こった耽美主義



2-13



2-14



2-15

的文芸運動。美術雑誌「方寸」に白秋や木下杢太郎らが寄稿家として加わり、美術と文学が交流して新しい近代文芸を育てようという杢太郎の提案により結成された。「パン」はギリシア神話の「PAN」（牧羊神）のこと。19世紀末のフランスに栄えた文芸サロンをモデルに、セーヌ川を隅田川に見立て、右岸両国橋に近い西洋料理屋「第一やまと」で第1回パンの会が行われた。

16・木村荘八「パンの会」

『木村荘八展 生誕90年記念』図録 昭和57年（1982）

個人蔵

木村荘八による油絵。当時少年だった木村はパンの会には参加しておらず、杢太郎から聞いた話をもとに描かれた。

17・「空に真赤な」（原稿）

当館蔵

この詩は、野田宇太郎によると「パンの会の時代と雰囲気のなかで生れた、北原白秋の小曲」で、パンの会で会歌のように歌われていた。「スバル」明治42年2月号に掲載され、同時に「方寸」明治42年2月特別漫画号に「Sora ni Makka ran」とローマ字表記で掲載された。

18・木下杢太郎宛書簡 明治42年（1909）2月19日

神奈川近代文学館

詩ができない上に体調もすぐれないので困っている。

19・森林太郎立案「東京方眼図」

春陽堂（初版） 明治42年（1909）6月

当館蔵 復刻版

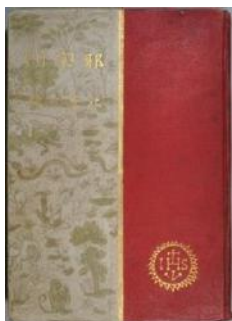
「パンの会」結成や『邪宗門』刊行など、まさに詩人として有名になりつつあった白秋が暮らしていた頃の東京の地図。

20・『邪宗門』 易風社 明治42年（1909）3月

当館蔵

第一詩集。明治39年4月から41年にかけての詩120編を収める。例言で「予が象徴詩は情緒の快樂と感覚の印象とを主とす」「予が最近の傾向はかの内部生活の幽かなる振動のリズムを感じその儘の調律に奏でいんとする音楽的象徴を専とする」と述べている。異国情緒と世紀末的な退廃美にあふれた官能的な世界を作り出し、白秋はこの詩集で耽美派詩人の地位を確立したとされる。石井柏亭と山本鼎が挿絵を担当し、装丁も石井が手がけた。日本近代象徴詩の一つの頂点をなす詩集と評される。父長太郎への献辞の「もはやもはや咎め給はざるべし」という言葉からは、かつて文学の道へ進むことを反対した父への思いがうかがえる。

21・「屋上庭園」創刊号



2-20



2-18



屋上庭園発行所(初版) 明治42年(1909) 10月

個人蔵 復刻版

明治42年10月に、白秋、木下柰太郎、長田秀雄を編集同人として創刊された、詩中心の雑誌。『邪宗門』刊行後、パンの会の詩人たちが機関誌としてつくったもの。表紙画は黒田清輝。

### 22. 「おかる勘平」

「屋上庭園」第2号掲載 明治43年(1910) 2月20日

個人蔵 復刻版

「屋上庭園」2号に掲載された白秋の詩。この作が「風俗壊乱」とされ発売禁止の処分を受け、この雑誌は本号で廃刊となった。処分が決まった日の晩は、パンの会のメンバーが「小伝馬町の参州屋」の階上へ集まって盛んに鬱憤を晴らした、と後に白秋は回想している。

### 23. 主宰雑誌「朱欒」 1巻1号 東雲堂書店 明治44年(1911) 11月

神奈川近代文学館

白秋の編集で刊行された、詩歌中心の文芸誌。表紙は高村光太郎画。室生犀星と萩原朔太郎はこの雑誌から詩人として出発する。

## 第3章 流浪——三崎、小笠原、葛飾

白秋は明治44年(1911)、第二詩集『思ひ出』を上梓します。幼少期の哀傷を鋭い感覚によって表現したこの作は高い評価を受け、詩人としての地歩を固めつつありました。

ところが翌年、隣家の女性松下俊子との恋愛事件が起こり、告訴、拘留されるといふ大きな試練を受けます。さらに同年、破産した郷里の家族が上京し、一家の生活を支えることになりました。その苦悩と生活を打開するため、大正2年(1913)に家族や俊子と、新生を求めて神奈川県三崎に転居しました。

本章では、苦境に立たされた白秋が、三崎や小笠原、葛飾などを転々とした時期をご紹介します。

### 1. 「詩人白秋起訴さる」 読売新聞 明治45年(1912) 7月6日

原本所蔵 国立国会図書館

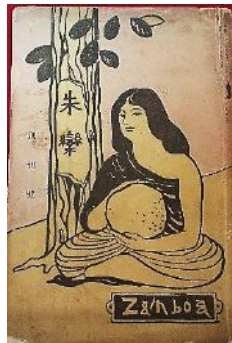
明治45年7月5日、白秋は隣家の女性松下俊子の夫から姦通罪で告訴され、東京地方裁判所検事局から起訴された。白秋は、夫の愛人に同居を迫られるなど心労が絶えない俊子に同情し、やがて恋愛に発展したという。俊子はすでに夫から離婚を言い渡されていたが、戸籍上はまだ離縁していなかったため訴えられることとなった。この事件で白秋は心身ともに大きな打撃を受けた。

### 邪宗門秘曲

われは思ふ、末世の邪宗、  
切支丹でうすの魔法。  
黒船の加比丹を、紅毛の不可思議国を、  
色赤きびいどろを、句鋭  
きあんじやべいいる、  
南蛮の棧留縞を、はた、阿  
刺吉、珍醜の酒を。

目見青きドミニカびとは  
陀羅尼誦し夢にも語る、  
禁制の宗門神を、あるはまた、  
血に染む聖磔、  
芥子粒を林檎のごとく見  
すといふ欺罔の器、  
波羅筆僧の空をも覗く伸  
び縮む奇なる眼鏡を。

——『邪宗門』



2-23

● 詩人白秋起訴さる

△文藝汚辱の一頁

北原白秋は詩人だ、詩人だけれど常人のすることを選ばずば他人から異常の掛難もされやう、昨五日東京地方裁判所の検事局から北原監吉として起訴せられた人は雅號白秋其の人である、起訴されたのは思ひなき姦通罪といふのだ

▲酒と女と嫌ひ 白秋の隣吉は今年二十八歳、筑後柳川の生れで家は代々酒造家であつた詩を作ることを好んで上京して早稲田の高等理科に入學してゐたところある文庫、明星などの起訴家て

3-1

2. 木下李太郎宛書簡 大正2年(1913) 6月3日

神奈川近代文学館

三崎に転居したことを伝える書簡。大した事情もないが、「財政上の都合と、この家の風致非常によろしき事と、当分静かに勉強したき多少確かなる気持」からここに越してきたのだとしつつ、「やはりこのごろは東京が恋しく相成候」と心境を述べている。後半では、今度出す詩集のために李太郎に依頼した挿絵について、パンの会の様子か、白秋と友人の様子を描いてほしいと希望を述べている。

3. 第三詩集『東京景物詩 及其他』 東雲堂書店 大正2年(1913) 7月

当館蔵 復刻版

「パンの会」時代の詩を中心に収められている。献辞には「わかき日の饗宴を忍びてこの怪しき紺と青との詩集を“PAN”とわが『屋上庭園』の友にささぐ」とある。大正2年6月3日付の書簡で白秋が李太郎に依頼しているのは、この『東京景物詩 及其他』のための挿絵だと考えられる。

4. 『桐の花』 東雲堂書店 大正2年(1913) 1月

当館蔵

第一歌集。明治42年から45年までの作が収められている。本文二色刷の自装で、挿絵も白秋が手がけている。近代フランス詩風を短歌に導入した文学史的にも重要な歌集と位置づけられ、斎藤茂吉に「日本が自慢していい」と言わせたという。

5. 『印度更紗 眞珠抄』 金尾文淵堂 大正3年(1914) 9月

当館蔵

「印度更紗」シリーズの「第一輯」として刊行された白秋の第四詩集。巻末の「眞珠抄余言」には、「この印度更紗は本輯以後各月一輯を上梓し、輯を変ふるが毎にその名を改め、色々に印度更紗の模様如くわが愛慕する人々の書架にかなしく入り乱さしむべし」とあり、シリーズとして毎月1冊ずつ刊行する予定だったことがわかる。「更紗」は、人物や花鳥、幾何模様などを捺染した木綿や絹の生地のこと。

6. 『印度更紗 白金之独楽』 金尾文淵堂 大正3年(1914) 12月

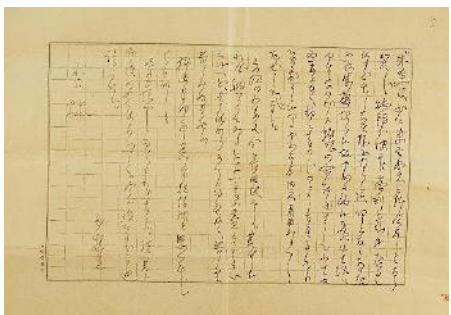
当館蔵

「印度更紗」シリーズの2番目に出された詩集。白秋は大きな意気込みをもってこのシリーズを始めたと考えられるが、当初の予想に反し2冊で終刊となった。

7. 第二歌集『雲母集』 阿蘭陀書房 大正4年(1915) 8月

当館蔵

三崎滞留中の歌を収めた第二歌集。白秋の自装で、挿絵も手がけている。俊



3-2

「春

春の鳥な鳴きそ鳴きそ  
あかあかと外の面の草に  
日の入る夕

はるすぎてうらわかぐ  
きのなやみよりもえいづ  
るはなのあかきときめき

二 夏 郷里柳河に帰りて

うたへる歌

廃れたる園に踏み入り  
たんばの白きを踏めば  
春たけにける

ケツグリのあたまに火の  
点いた、潜うんたら消えた  
吾弟らは鳩のよき菓を

かなしむと夕かたまけて  
さやぎいでつも

哀傷篇

かなしきは人間のみち  
牢獄みち馬車の軋みてゆ  
く磔道

編笠をすこしかたむけ  
よき君はなほ紅き花に見  
入るなりけり

子との恋愛事件で人生的な試練を受けた白秋が、『桐の花』の歌風からの脱却をはかった時期のもの。前半には「懺悔の涙」や「流離の悲しみ」、あるいはそこから解放された「自由の喜び」など恋愛事件にかかわる題材が詠われているが、後半では三浦三崎の陽光の中で生まれたスケールの大きな歌が多くみられる。

8. 斎藤茂吉『赤光』しやうくわう 東雲堂書店(初版) 大正2年(1913) 10月初版  
当館蔵 復刻版

斎藤茂吉の第一歌集。明治38年から大正2年までの作が収められている。万葉調を重視した根岸短歌会の「写生」を基調とし、近代人の孤独感や悲哀の感情が表現されている。連作「死にたまふ母」が集の中心をなしている。『赤光』を読み深く心を打たれたという白秋は、ちょうどこの歌集が出された大正2年に茂吉と初めて親しく話す機会を得ている。

9. 『斎藤茂吉選集』 アルス 大正11年(1922) 1月

個人蔵

「アルス名歌選」シリーズの10番目に刊行された斎藤茂吉の歌集。白秋が選歌と序文を担当した。同時刊行の『北原白秋選集』(選歌と序文は斎藤茂吉)とまとめて、後に『白秋茂吉互選歌集』として出版されている。

10. 詩文集『雀の生活』 新潮社 大正15年(1926) 6月

当館蔵

『雀の生活』の初版は、大正9年2月20日、新潮社より刊行された。葛飾、小岩山谷に移り、雀とともに生活していた日々、雀の生態を観察することによって思索を深めた。アルス版全集第12巻の「後記」には、「雀と生活した葛飾の紫煙草舎時代に声を発し、その以前の麻布時代、後の小田原時代にまで翼を広げて居る。主題は雀の生活であるが、貧しい者の魂の記録でもある」と述べられている。

11. きじぐるま雉子はなかねど日もすがら父母こひしきじの尾ぐるま(短冊)

初出「潮音」 3巻6号 大正6年(1917) 6月

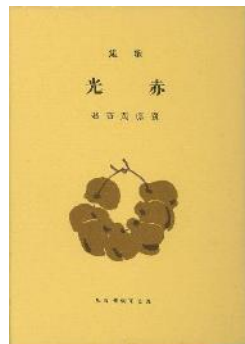
当館蔵

雉子車きじぐるまとは、九州地方の伝統的なおもちゃのこと。第3歌集『雀の卵』に収録された際に、「柳河の玩具」という題と、「雉子ぐるまは筑後の清水観世音にて売る。この古刹は行基菩薩の開基にかかる。京の清水山はこのわかれなり。この山の近きほとりに行基橋といふもあり。」という註が付された。

白秋はこうも述べている。「雉子ぐるまを思ふと小供の時の事が忍ばれる。昼は遊びにまぎれてもあるが、日が暮れかかると急に父母の恋しくなった童の心が恋しくなる。雉子ぐるま、雉子ぐるま、私もあの頃がなつかしい。『洗心雑話』大正10年7月」

12. 萩原朔太郎『月に吠える』

感情詩社、白日社出版部 大正6年(1917) 2月初版



斎藤君との互選については、もともと私の提言であつた。で、私としては友愛と尊敬との表示を斎藤君から少しでも見て貰へば満足に思ふ。私は此の選集に於て敢て厳正な批判をしようといふ心は無い。私は私のいいと思ひ、私の好むところの歌を自由に選ばして貰つて、それを親しいそれらの歌の作者たる茂吉君に心からデヂケエトする機会を得た事を何より自分の幸福とする。のみならず、この俊秀な歌人と同じ時代に幸にも生れ合せた因縁を思ふと歓喜が湧く。

——「斎藤茂吉選集序」

当館蔵 改刷

萩原朔太郎の第一詩集。病的で繊細、心理的陰鬱の濃い詩集として注目された。朔太郎は、白秋が編集を担当した文芸誌「朱鸞」から出発したこともあり、白秋と交流があった。白秋による序文には「萩原君。何と云つても私は君を愛する。さうして室生君を」という語が冒頭と末尾に出てくる。白秋が東京にいる時に、突然朔太郎に会いたくなくなって前橋まで会いにいったこともあり、親しい間柄であった。

13・萩原朔太郎年賀状 大正7年（1918） 1月2日

当館蔵

「賀正 一月一日 前橋市北曲輪 萩原朔太郎」

14・日夏歌之介年賀状 大正7年（1918） 1月1日

当館蔵

日夏歌之介は、神秘主義的な象徴詩が特徴とされる詩人。この年賀状では、今日一杯飲みに来ないか、と白秋を家に誘っている。日夏は白秋の詩に対し、思索や想念がないと厳しく批判したことがあった。

## 第4章 再起——小田原

大正7年（1918）2月、白秋は妻章子の療養のため、小田原町（現小田原市）の養生館にやってきました。お花畑、伝肇寺と居を移し、天神山に初めて自分の家を建てます。その後、新しい妻菊子を迎え、文筆活動は活発化、窮乏していた生活に光が見えはじめました。

同年、鈴木三重吉が児童文学雑誌「赤い鳥」を創刊するにあたり、白秋は童謡を担当することになります。生涯で創作した童謡の半分近くが小田原時代につくられ、すぐれた童謡詩人や、後に文壇、詩歌壇に名をなす多くの人々を育てました。

本章では、充実した創作活動を行い、木菟の家建設、佐藤菊子との結婚、長男隆太郎・長女篁子誕生など、私生活でも安定した時期を迎えた小田原時代をご紹介します。

### 1. 養生館（写真）

当館蔵

大正7年3月、白秋は妻章子の療養のため小田原へやってきました。まず御幸の浜の養生館に投宿しており、これはこの旅館の親類で早稲田大学講師でもある、美術評論家河野桐谷の紹介と言われる。その後小田原町（現小田原市）十字町お花畑、天神山の伝肇寺と居を移した。



2. 「赤い鳥」 1巻1号

当館蔵 復刻版

鈴木三重吉によって創刊された児童文学雑誌。三重吉は「功利とセンセイシヨナルな刺戟と変な哀傷とに充ちた下品なものだらけ」の子どもの読物の現状を憂い、子どもたちのために立派な読物をつくってあげたいとの思いから創刊したと述べている。白秋はその趣旨に賛同した一人で、童謡面を担当した。

3. 鈴木三重吉宛書簡 大正7年(1918) 12月6日

神奈川近代文学館

「赤い鳥」の応募童謡で大人と子どもを分けたらどうかということ、ある人から美術音楽童謡童謡専門雑誌の専属作家になるよう依頼されたが断ったことなどを述べている。末尾で妻の病気が良くなったことにふれ、「小田原にかぎりませ」と三重吉を小田原に誘っている。

4. 東雲堂 西村陽吉書簡 大正7年(1918)

当館蔵

出版社からの書簡。今度出す短歌雑誌に、「歌集の追憶」として第一歌集『桐の花』について書いてほしいと依頼している。

5. 井上康文書簡 大正7年(1918) □月15日

当館蔵

小田原出身の詩人井上康文の、転居先を知らせるはがき。「此頃淋しくつて仕方がありません。小田原の人たちはみんな元気ですから急に一人になつてしまつて」と白秋へ孤独を訴えている。

6. 志賀直哉年賀状 大正9年(1920) 1月

当館蔵

我孫子から出された志賀直哉の年賀状。俊子との事件が起こった際、志賀は白秋の身を案じていた。

7. 藪田義雄『評伝 北原白秋』 玉川大学出版部 昭和48年(1973) 6月

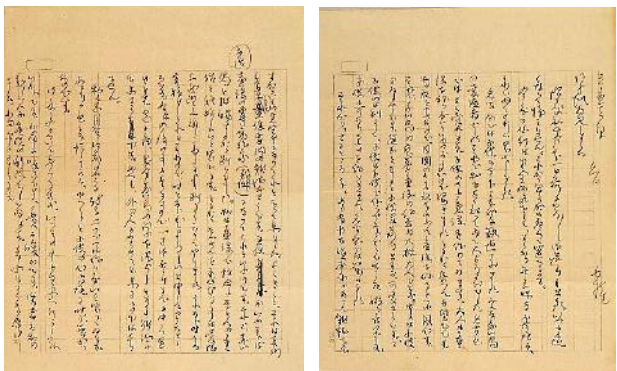
当館蔵

白秋の弟子であり、秘書も務めた詩人、藪田義雄による白秋の評伝。白秋に関係する人物からの直接の見聞など、身近な人間だからこそ知りえた情報を交えて書かれており、白秋研究の上で重要な役割を果たしている。大正7年、小田原中学(現県立小田原高校)の生徒であった藪田が、国語の先生に連れられて白秋のいる伝肇寺を訪ねたのが二人の出会いであった。

8. 「泣け泣け」原稿 初出「福岡日日新聞」 大正9年(1920) 1月1日

当館蔵

『まざあ・ぐうす』に収録。「福岡日日新聞」(大正9年1月1日)に掲載された。



赤い鳥の応募童謡の作者は大概大人ですが、中には子供があるやうです。選むとなると子供のは落ちますが、可愛さうです。で子供のは別にして、子供は子供で作らせたらどうでせうか、綴り方のやうに。〔中略〕

ある有力な資本家があつて雑誌を出すから、その主宰になつてくれと云つて来ました。〔中略〕赤い鳥と抵触するから断りました。私は童謡で飽迄も貴兄の童話と終始したいと思います。とにかく貴兄を裏切る事は愛情上義理上致しかねるにより断ると云つてやりました。

——「鈴木三重吉宛書簡」

大正7年12月6日

(神奈川近代文学館蔵)

9. 福田正夫宛はがき 大正9年(1920) 4月30日

当館蔵

新築する家の地鎮祭について述べている。この家は木兎の家の隣に建設された3階建の洋館、白秋山荘を指す。

10. 『まざあ・ぐうす』 アルス 大正10年(1921) 12月

当館蔵

イギリスの伝承童謡マザー・グース (Mother Gooses Nursery Rhymes) を翻訳したもので、日本で初めて本格的に翻訳紹介したのは白秋だとされる。挿絵は恩地孝四郎による。白秋は創作童謡のほか、こうした伝承童謡や日本の古くからのわらべ唄などにも目を向けていた。

11. 「歌へ六片の歌を」<sup>ラヴェンス</sup> 原稿

初出「婦人倶楽部」 大正10年(1921) 8月発表

当館蔵

『まざあ・ぐうす』に収録。「婦人倶楽部」(大正10年8月1日)に掲載された。

12. 「卵」原稿 初出「芸術自由教育」 大正10年(1921) 5月発表

当館蔵

『まざあ・ぐうす』に収録。「芸術自由教育」4号(大正10年5月1日)に掲載された。

13. 第一歌謡集『白秋小唄集』 アルス 大正8年(1919) 9月

当館蔵

14. 第三歌集『雀の卵』 アルス 大正10年(1921) 8月

当館蔵

第三歌集。「大序」には『雀の卵』此の一卷こそ私の命がけのものであった。この仕事を仕上げるばかりに、私はあらゆる苦難と闘つて来た。貧窮の極、餓死を目前に控へて、幾度か堪へて、たうとう堪へとほしたのも、みんなこれらの歌の為めばかりであつた」とある。貧窮をきわめた葛飾時代から小田原時代までの歌が収められている。

15. 「ねんね唄」原稿 『祭の笛』収録

当館蔵

『祭の笛』の中の「ねんねのうた」の一つ。「揺籠のうた」の後に収録されている。

16. 雑誌「詩と音楽」震災記念号(2巻9号/終刊号)

大正12年(1923) 9月



泣け泣け

泣け泣け、赤ちゃん、  
眼玉にお指を突つ込み  
な。

そしてお母さんへ行つた  
らば

あれは坊やぢや無いとお  
云ひ。

——『まざあ・ぐうす』

当館蔵

白秋と山田耕筰が、詩と音楽の統一を目的に創刊し、アルスから発行された。大正12年9月、この「震災記念号」を出して終刊した。アルスから「謹告」として社の震災被害状況が掲載されたほか、白秋は「再び山荘より」という文章の中で震災時の状況について述べている。

17・『旅窓読本』学芸社 昭和12年6月

エッセイ風の短い文章が季節ごとに掲載された短編集。巻末広告によると、「旅には旅窓読本を!!」というキャッチコピーのシリーズの1冊で、吉井勇や中川一政、田山花袋など作家ごとに出版されている。「紀行文を主として、しかも季節にして欲しいといふ書肆の希望」におおむね応えたというが、夏の19編に対し、秋は4編、冬は6編しか掲載されていない。白秋によると、これは「私の旅行なるものが、秋冬に少く、盛夏の前後に爆進することが多いため」である。

## 第5章 新生——再び東京

小田原で初めて自分の家を持ち、公私ともに安定した時期を送っていた白秋ですが、大正12年（1923）の関東大震災で家が半壊してしまいます。しばらくは小田原に住み続けますが、同15年（1926）に一家で上京し谷中に住み、その後は大森、世田谷若林、同成城と転居を重ねました。

この頃の白秋は、詩誌「近代風景」や歌誌「多磨」などで旺盛な活動を続けました。

しかし、昭和12年（1937）に眼底出血によって光をほとんど失います。それでも芸境の完成に必死の努力を続けますが、同17年（1942）に阿佐ヶ谷の自宅で亡くなります。

本章では、小田原を出て都内各地で居を移しながら、詩歌壇の第一人者として活躍した頃から没後までの時期をご紹介します。

1. 『風景は動く』 アルス 大正15年（1926）6月

当館蔵

おもに小田原時代に書かれた文章を集めた短編集。あとがきには、「書き散らした何も彼もをかき蒐めた」「あの小田原から、私はこの五月に此処の谷中に移った。天王寺の墓地の横、珠数の珠磨る人々の長屋の隣が、今の私の新居である。〔中略〕——「風景は動く」／私自身の風景も動いて来た」とある。正月や梅など、季節を感じさせるものを題材にした文章も多く収録されている。



2. 『からたちの花』 新潮社 大正15年(1926) 6月

当館蔵

3. 「もとゐたお家」原稿 初出「赤い鳥」大正15年(1926) 8月

当館蔵

小田原から上京した頃に発表されており、小田原の旧居が題材になっている。

4. 詩誌「近代風景」 アルス

当館蔵

白秋が創刊主宰してした詩誌。蒲原有明、河合醉茗、小川未明、萩原朔太郎、室生犀星などが執筆した。

5. 『フレップ・トリップ』 アルス 昭和3年(1928) 2月

当館蔵

大正14年の樺太・北海道旅行の紀行文集。装丁は恩地孝四郎による。表紙は、「フレップの実は赤く、トリップの実は黒い。いづれも樺太のツンドラ地帯に生ずる小灌木の名である。採りて酒を製する。所謂樺太葡萄酒である」という扉の言葉を大胆に意匠化したもの。全体的に楽しい文章で、雑誌「女性」連載中から好評であった。

6. 『フレップ・トリップ』 広告

昭和3年(1928) 8月

当館蔵

「生誕」(三十輯記念号)に掲載された。

7. 「空中旅行記 天を翔る」(1)

大阪朝日新聞 昭和3年(1928) 8月3日

原本所蔵 国立国会図書館

昭和3年7月、大阪朝日新聞社の依頼で「天を翔る」という企画を行った。これは、福岡から仙台まで、飛行機ドルニエ・メルクル機に搭乗した文学者がそれぞれ機上からの紀行文を新聞紙面に発表するというものであった。福岡県太刀洗飛行場から大阪までの一区は白秋と長男隆太郎、大阪から東京までの二区は久米正雄夫妻、東京から仙台までの三区は佐々木茂索夫妻が担当した。

8. 「生誕」三十輯記念号 生誕社 昭和3年(1928) 8月

当館蔵

詩と歌を中心とした郷土の詩人のための同人誌として、小田原出身の詩人藪田義雄が創刊した文芸雑誌(大正12年4月〜昭和3年8月。創刊時の誌名は「郷愁」で、5号より改題。全30冊)。北原白秋や野口雨情も寄稿した。最終号となる今号に白秋は「小田原への消息」を掲載し、表紙も手がけている。



5-5

イツテクルヨ、  
ランランラン

かう私は小田原の妻子  
へ打電するやうに弟に頼  
んだが、船が出ると船員が  
私の前に「電報がまるつて  
居ります。」と私を探しに  
来た。

イツテラツシヤイ、  
バンザイ、パバ、  
バンザイ

私は微笑した。そうして  
竹林の中の草深い私の家  
を、土間の篠竹を、また紅  
い芙蓉や黄のカンナを、妻  
と二人の子を、その一人は  
生れてやつと一と月にし  
かならぬ篋子のことを、夜  
はまた満天の星座と浪の  
音と虫の声々とに聞けて  
ゆく壊れかかった二階の  
バルコンと寝室とを私は  
また心にふり返つた。  
心は安く、気はかろし、  
揺れ揺れ、帆綱よ、  
空高く……

——『フレップ・トリップ』

より



9. 『白秋全集』 13 アルス

当館蔵

白秋の生前、アルスから出された全集。豪華版と2種類が刊行された。この巻は小田原についての文章がまとめられている。

10. 『指導と鑑賞 児童詩の本』

帝国教育会出版部 (初版) 昭和18年(1943) 4月

当館蔵 復刻版

児童自由詩を提唱した白秋は、童謡創作と同時進行で指導と実践に乗り出した。児童自由詩運動の最初の成果が『鑑賞指導 児童自由詩集成』で、引き続き最晩年まで続けられた成果が『指導と鑑賞 児童詩の本』である。白秋の没後刊行された。

11. 『明治大正詩史概観』 改造社 昭和8年(1933) 12月

個人蔵

12. 歌誌「多磨」 アルス、のち多磨短歌会

当館蔵

白秋がつくった結社「多磨短歌会」の機関誌。当時の白秋は、歌壇に浪漫主義、象徴主義の新風を立てるべく、雑誌の発行を決意したとされる。

13. 少国民詩集『満州地図』 フタバ書院成光館 昭和17年(1942) 9月

当館蔵

14. 『海道東征』 靖文社 昭和18年(1943) 6月20日

当館蔵

日本文化中央連盟から依頼され、「紀元二千六百年頌」として創作した交響曲詩。創作時、白秋は眼を悪くしていたため、資料を家族に大きく書き写してもらったり読んでもらったりし、口述筆記が主であったという。この作によって第二回福岡日日新聞文化賞を受賞した白秋は授賞式参列のため、家族同伴で帰郷した。

15. 「不滅の業績を讃ふ 第二回福日文化賞贈呈式」

「福岡日日新聞」 昭和16年(1941) 3月17日

原本所蔵 国立国会図書館

「海道東征」で受賞した白秋を含めて4人に対して贈られた、第2回福岡日日新聞社の文化賞授賞式の様子を報じた記事。

16. 白秋訃報 「朝日新聞」 昭和17年(1942) 11月3日

当館蔵

昭和17年11月2日早朝、長男の隆太郎が新鮮な空気を入れようと病室の窓を少し開けると、白秋は「ああ、蘇った。新生だ、新生だ、隆太郎、この日をよく覚えておおき、ああ素晴らしい」。それが最期の言葉だった。享年は57。



17・白秋訃報 「東京日日新聞」 昭和17年(1942) 11月3日

当館蔵

白秋が亡くなった翌日の記事。

18・前田夕暮「北原白秋君を憶ふ」

「朝日新聞」 昭和17年(1942) 11月3日

当館蔵

白秋と親交のあった歌人前田夕暮が、亡くなる10日ほど前に訪問した際、白秋が再出発を宣言していたことなどを回想している。

19・北原白秋デスマスク(写真) 昭和17年(1942) 11月

写真提供 北原白秋記念館

恩地孝四郎が製作した。

20・石井了介「藪田義雄宛」書簡 昭和36年(1961) 11月17日

当館蔵

白秋の従弟で版画家の石井了介から、白秋の弟子藪田義雄にあてた書簡。建立予定の白秋碑に使用する石を入手するのに苦労していることや、親戚や弟子などの白秋祭(白秋忌)への出席はまれになっているが、翌年の没後20年は白秋記念館などの計画もあり、盛大に行われそうだということなどを述べている。

### 謝辞

本展開催ならびに本冊子制作にあたり、次の個人・機関の方々より御協力を賜りました。

御芳名を記し、心より御礼申し上げます(五十音順、敬称略)。

柳川市・柳川市教育委員会

神奈川近代文学館

北原白秋生家・記念館

神奈川県立図書館

柳川市観光協会

九州大学附属図書館付設記録資料館

三浦市・三浦市教育委員会

国立国会図書館

日本近代文学館

堤伴治

柳川古文書館

和田明子

早稲田大学大学史資料センター



## 柳川市・三浦市交流展示

### 白秋ゆかりの地 柳川・三浦

白秋が暮らしたゆかりの地、柳川、三浦、そして小田原。そこに至る事情は異なっても、その地で暮らした白秋の心を捉えたものは、共通であるのかもしれない。

彼の生きた時代や風景に思いを馳せ、白秋ゆかりの地をご紹介します。

平成27年1月25日に福岡県柳川市で開催された白秋サミットでの結びつきを生かし、白秋ゆかりの関係市町との更なる交流を深めてまいります。

#### 1. 柳川市写真パネル

北原白秋生家

沖端水天宮

「水郷柳河」沖端地区の掘割

沖端漁港

日吉神社脇の掘割を行く川下り船

「帰去来」の詩碑

柳川藩主立花家別邸「御花」

白秋祭

#### 2. 白秋サミット

白秋サミット共同宣言文

写真たて（記念品）

柳川まり

写真アルバム

パンフレット（白秋サミット開催時配布）

#### 3. さげもん・柳川のひな祭り

さげもん一対（柳川市観光協会）

ひな人形（内裏雛）

白秋カルタ

#### 4. 三浦市写真パネル

城ヶ島白秋詩碑、城ヶ島

白秋記念館（三浦市）

見桃寺歌碑

みさき白秋まつり（白秋碑前祭）

#### 5. 柳川市案内図（柳川・沖端）・三浦市案内図（三崎・城ヶ島）

# 資料翻刻

## 凡例

1. 資料名冒頭番号は冊子中の資料番号を示す。
2. 翻刻にあたり、常用漢字等に改めた箇所がある。
3. 行替等は原資料に拠った。
4. 「〔 〕」は翻刻者による補足を示す。

4-4 東雲堂 西村陽吉書簡（はがき） 大正7年（1918）年

相州小田原町十字町

四丁目九一〇

北原白秋様

東京市日本橋区檜物町九番地

東雲堂書店

西村陽吉

拝啓東北の方の旅行から去る四日帰京しました。桐の花は象眼の原稿を文輝堂で紛失したので、鉛版の校正を明日中に御送りいたしますから、御面倒乍ら御一閱ねがひます。それから短歌雑誌に薦め歌集の追憶として桐の花の事を書いて頂けませんか。十五日までに送って頂ければ六月号に。七月号なれば本月中に御送りねがひます。小田原はこのごろよろしいでせうね。

4-5 井上康文書簡（はがき） 大正7年（1918）年□月15日

さかみ小田原町

十字町お花畑

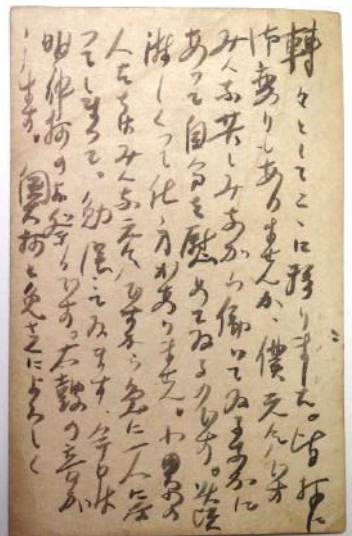
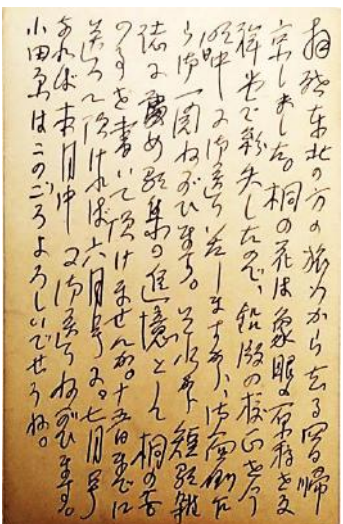
北原白秋様

本郷区湯島町四ノ三

大東館内

井上康文

転々としてこゝに移りました。皆様に御変りもありませんか、僕元氣です。みんな苦しみながら働いてゐるなかにあって自分を慰めてゐるのです。此頃淋しくって仕方がありません。小田原の人たちはみんな元氣ですから急に一人になつてしまつて。勉強してゐます、今日は明神様のお祭りです。太鼓の音がします。奥様と兎さんによろしく



4-6 志賀直哉年賀状 大正9年(1920)年1月

相州小田原町

十字町二丁目

伝肇寺 木兔の家

北原白秋様

賀正

志賀直哉

僕も久しく御無沙汰しました「雀の生活」

お送り下さる由楽みにしてゐます。

僕は此四月頃から東京へ出て住むつもり

にしてゐます。我孫子も然し此頃は中々

好きになりました。

4-9 福田正夫宛書簡(はがき) 大正9年(1919)年4月30日

小田原在石橋

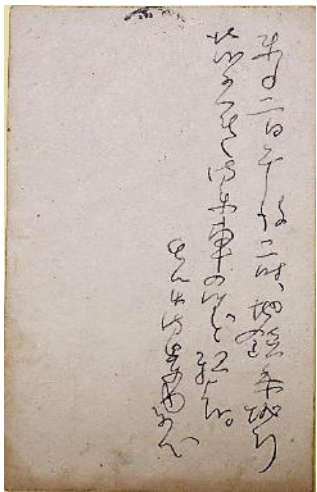
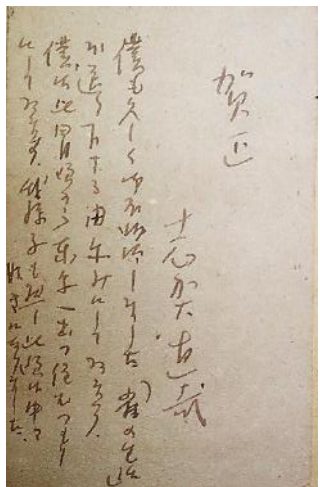
小学校内

福田正夫様

三十日 木兔の家

来る二日午後二時、地鎮祭執行  
仕候につき御来車のほど願上候

先は御案内まで



5-20 石井了介書簡(藪田義雄宛) 昭和36年(1961)年11月17日

御便おなつかしく拝誦いたしました。かねて御無沙汰のみで失礼いたしました。益々御清祥にあらせられ大慶に存じます。

御詩集御出版 昨日拝受いたしました。

重厚な深い色合の装禎で真に立派で御座居ます

詩についてはゆつくり拝誦いたし 私ワタクシの修道の糧カシといたしたいと存じます。

さて正月御連絡いたしました白秋詩碑建立

については石さへ見つかれば出来るだけ早くと思つて

をりますか。なか／＼適当なものが未だ探し当てません

心あたりの人にも依頼して、もう山へ六度ばかり登つて

見ましたが、詩碑としての格構カウキョウ 字ジを刻するに硬軟

疎ス密ミまち／＼で はじめ石材についての智識は全

く持合せなく簡単に入手出来るものと思つてゐました

が探して見ると、なか／＼思ふ様なものが少ないよワタクシ

です。近日中に又、友人の紹介で7、8里はなれて

はおりますが山へ登ることになつてゐます。

御言葉の通り庭の木蘭の花咲く頃を目標に

いたしておりますが出来ませうかしら。

建てる場所も木蓮の樹の下にしたいと思つてお

ります。それで実は玉蘭の歌が最もふさわ

しいとは思ひますが直筆がないので躊躇してお

りますが、直筆がない場合よそではどんな

方法をとられてみますでしよーか。<sup>(ママ)</sup>

「道の手」の原稿は入手いたしましたでしたが全部ですと大変長いものになりますので最初か最後の一節を切取らねばならぬと思ひますがそれでも横物となるよーです<sup>(ママ)</sup>。

白秋逝いてはや19年 毎年柳河では市主催で白秋祭を続けております。私も招かれますので毎年出席いたしをりますが 弟子親戚なども出席が稀です。来年は二十週年にあたりますのでなほ盛大にやること、思ひます。白秋記念館、水上詩碑などの計画もあるよーです。

私の田舎住ももう二十年近になるわけですが絵の事など全く縁遠い環境で甚だ淋しい事ですが絵の道は続けております。農協長に引出されてからもう十二年 農協がすずかり私の職場になつてしまつた感がありますが 日曜画家ではあります

今年のは「牛」(P.60) 会期は12月6日迄のよーですか<sup>(ママ)</sup>ら若しおついでの折もありましたら拙作ですが御覧いたゞけば幸に存じます。(招待券がありましたので一枚同封いたしました)

白秋の詩、歌を一版に見たいと思つておりますが近日二三作つて見たいと思つております出来ましたら御送りいたします。

では又御機嫌よう。

11月17日

石井了介

藪田義雄様

参考

# 短歌と詩の流れ

江戸時代から  
明治時代前期

明治時代  
中期～後期

大正時代

昭和初期

川田順

伝統的な歌学  
(二条派が主流)

**桂園派**  
…古今和歌集を重視  
…万葉集を重視

国学者による研究

竹柏会  
…「心の花」

佐佐木信綱  
川田順  
木下利玄

浅香社  
落合直文  
与謝野鉄幹

**写生主義**  
根岸短歌会  
正岡子規  
「歌よみに  
与ふる書」

**自然主義**  
車前草社  
若山牧水  
前田夕暮

「馬酔木」  
伊藤左千夫  
長塚節

**浪漫主義**  
新詩社  
「明星」  
与謝野鉄幹  
与謝野晶子  
北原白秋  
吉井勇  
木下杢太郎  
平野万里  
石川啄木

「アララギ」全盛期

伊藤左千夫  
長塚節  
島木赤彦  
斎藤茂吉  
釈空  
(折口信夫)

「日光」  
対抗  
北原白秋  
前田夕暮  
木下利玄  
釈空

**新浪漫主義**  
「多磨」  
…新古今集的な幽玄  
北原白秋  
木俣修  
宮終二

**理想主義詩**  
高村光太郎

漢詩  
…在来の韻文  
(和歌、俳句、  
甚句、俳句、  
都々逸など)

西洋の  
近代詩  
…漢詩形式による  
…翻訳により  
流入

**浪漫詩**  
「明星」  
与謝野鉄幹  
石川啄木  
北原白秋

**新体詩**  
…韻文(七五調など)  
…叙情・叙事的  
「新体詩抄」  
「於母影」

新声社  
落合直文  
森鷗外

**象徴詩**  
上田敏  
蒲原有明  
北原白秋  
「邪宗門」

「文学界」  
北村透谷  
島崎藤村  
土井晩翠

**耽美派**  
北原白秋  
木下杢太郎

口語自由詩  
…文語体からの脱却

高村光太郎  
萩原朔太郎  
室生犀星

**自然主義**  
社会主義詩  
石川啄木

**(反民衆詩派)**  
…民衆詩派に属さない  
グループの総称  
萩原朔太郎  
堀口春夫  
北原白秋  
大木惇夫

「詩と評論」  
…モダニズムの  
導入  
西脇順三郎  
三好達治

**民衆詩派**  
室生犀星  
福田正夫  
井上康文  
白鳥省吾

**四季派**  
「四季」  
…叙情・自然中心  
三好達治  
中原中也  
立原道造

**前衛詩**  
宮沢賢治

**プロレタリア詩**  
中野重治

**「歷程」**  
草野心平  
中原中也

北原白秋略年譜

つきごと

年号	年齢	文学史事項	世の中のできごと
明治18		坪内逍遙 「小説神髓」	内閣制度設立
明治20	2	二葉亭四迷 「浮雲」	明治22 大日本帝国憲法発布
明治24	6	幸田露伴 「五重塔」	
明治26	8	北村透谷 「内部生命論」	
明治28	10	樋口一葉 「たけくらべ」	日清戦争
明治29	11	与謝野鉄幹 「東西南北」	
明治30	12	島崎藤村 「若菜集」	
明治32	14	土井晩翠 「天地有情」	治外法権撤廃
明治34	16	与謝野晶子 「みだれ髪」	
明治35	17	正岡子規 「病牀六尺」	
明治36	18		
明治37	19		明治37〜38 日露戦争
明治38	20	夏目漱石 「吾輩は猫である」	
明治39	21	夏目漱石 「坊っちゃん」	
明治40	22	田山花袋 「蒲団」	
明治41	23	島崎藤村 「春」	
明治42	24	田山花袋 「田舎教師」	
明治43	25	石川啄木 「一握の砂」	韓国を併合
明治44	26	若山牧水 「路上」	関税自主権回復
明治45 (大正元)	27	石川啄木 「悲しき玩具」	中華民国成立



昭和7	昭和6	昭和5	昭和4	昭和3	昭和2	大正15 (昭和元)	大正14	大正13	大正12	大正11	大正10	大正9	大正8	大正7	大正6	大正5	大正4	大正3	大正2
47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28
刊。1月、信州池の平で妻子と初スキ。10月、吉田一穂、福士幸次郎、大木惇夫と季刊「新詩論」創刊。庄亮と浜名湖、美濃方面を回遊。11月、妻子と富士五湖に遊ぶ。季刊「短歌民族」創刊。	5月、砧村大蔵西山野に転居。「白秋地方民謡集」刊。	3月1日、神戸出港、満鉄の招きで中国東北部を旅し、満洲里まで行く。4月6日、神戸帰港、出迎えの妻子と法隆寺を訪ね、10日、横浜帰港。5月1日、北九州の旅に出立、6月11日、空路で立川に帰着。	「緑の触角」刊。4月、「明治大正詩史概観」を「現代日本文学大全集」に発表。6月、「月と胡桃」刊。	1月、「詩人協会」設立。4月、世田谷区若林に転居。7月、20年ぶりに帰郷、大阪朝日新聞の依頼で郷里と太刀洗・大阪間を恩地孝四郎と飛行、のち妻子と大分方面に遊ぶ。8月、五浦に旅。初冬、正倉院拝観。	3月、大森緑ヶ丘に転居。5月、アルスの「日本児童文庫」のため闘う。	「二重虹」刊。5月、上京し谷中天王寺墓畔に転居。「からたちの花」「風景は動く」「象の子」ほか刊。11月、詩誌「近代風景」創刊。	「季節の窓」「子供の村」刊。6月、長女篁子誕生。8月、吉植庄亮と樺太・北海道旅行。松島にも遊ぶ。	1月、両親妻子と三保に遊ぶ。4月、千櫻、夕暮、善鷹、釈迢空、木下利玄らと「日光」創刊。	前田夕暮らの知友と三崎、武州御嶽、印旛沼、塩原に遊ぶ。6月、「水墨集」、7月、「花咲爺さん」刊。9月、震災で山荘半壊、竹林幽居。	1月、斎藤茂吉と互選歌集を編む。3月、長男隆太郎誕生。「日本の笛」「祭の笛」刊。9月、山田耕柝と「詩と音楽」創刊。民衆詩派と論争。	1月、片上伸、山本鼎、岸辺福雄と「芸術自由教育」創刊、童謡論も発表。4月、佐藤菊子と結婚。歌集「雀の卵」ほか「兎の電報」「童心」「洗心雑話」「まさあ・ぐうす」刊。「落葉松」発表。	2月、「雀の生活」刊。5月、隣接地に赤レンガの洋館「白秋山荘」新築に着手。地鎮祭後、章子と離婚。夏、「白秋詩集I」刊。	3月、小説「葛飾文章」を「中央公論」に発表。「金魚経」を「雄弁」に連載、窮乏を脱する。夏、境内に「木兎の家」と竹林に小方丈を建立。最初の童謡集「とんぼの眼玉」刊。	3月、小田原十字お花畑に転居。7月、鈴木三重吉の「赤い鳥」創刊に協力、童謡面を担当。秋、天神山の浄土宗伝鑿寺に寄寓。「雀の生活」を「大観」に連載。11月、名古屋に三週間滞在。	6月、上京、窮乏を極める。弟鉄雄、出版社「アルス」創立。妹家子、山本鼎と結婚。	5月、江口章子と結婚、千葉県東葛飾郡真間の亀井院に寄寓。7月、南葛飾郡小岩村三谷に移り、「紫煙草舎」を創立。10月、「白秋小品」刊。11月、「烟草の花」創刊。清貧の中で雀と哀歎する。	1月、萩原朔太郎を前橋に訪ね、約一週間滞在。4月、弟鉄雄と阿蘭陀書房創立。「ARS」創刊。8月、歌集「雲母集」刊。	2月、小笠原父島へ渡る。单身残留し、7月、帰京、麻布十番の一家と同居。貧窮の末、俊子と離婚。9月、「地上巡礼」創刊。12月、詩集「白金の独楽」刊。	1月、三浦三崎へ渡り二週間滞在。第一歌集「桐の花」刊。4月、前夫と別れた福島俊子と再会し結婚。5月、一家を挙げ三崎向ヶ崎異人館に転居。7月、「東京景物詩」刊。秋、一家帰京。10月、臨済宗見桃寺に寄寓。11月、巡礼詩社を創立。
		三好達治「測量船」	島崎藤村「夜明け前」		芥川龍之介「河童」	川端康成「伊豆の踊子」	梶井基次郎「檸檬」	宮沢賢治「春と修羅」	萩原朔太郎「青猫」	芥川龍之介「藪の中」	志賀直哉「暗夜行路」	斎藤茂吉「短歌に於ける写生の説」		福田正夫ら「民衆」創刊	萩原朔太郎「月に吠える」	森鷗外「高瀬舟」	芥川龍之介「羅生門」	高村光太郎「道程」	斎藤茂吉「赤光」
五・一五事件	昭和6、7 満洲事変		世界恐慌		金融恐慌		普通選挙法成立 治安維持法成立		関東大地震		小田原事件			米騒動 大正7、11 シベリア出兵				大正3、7 第一次世界大戦	

昭和8	昭和9	昭和10	昭和11	昭和12	昭和13	昭和14	昭和15	昭和16	昭和17
48	49	50	51	52	53	54	55	56	57
4月、「赤い鳥」と絶縁、成城学園紛争で小原国芳を擁護し、秋まで奮闘。6月、年纂全集「全貌」発刊。10月、「鑑賞指導・児童自由詩集成」刊。	1月、「白秋全集」完結、那須でスキー。4月、歌集「白南風」刊。6月、須走「野鳥の会」に参加。月末から総督府の招きで台湾巡遊後、8月半ば紀州白浜に遊ぶ。	1月、伊豆湯ヶ島に滞在。5月下旬から西九州、瀬戸内海を廻る。6月、多磨短歌会を結成、「多磨」創刊。夏、大阪毎日新聞社の依頼で朝鮮巡歴、白山春那と奥多摩小河内村を探勝。11月、信州霧ヶ峰に遊ぶ。生誕50年記念「白秋を歌う夕」開催。	1月、砧村成城南の丘に転居。8月、大和志貴山で多磨全国大会。秋、「赤い鳥」終刊号に弔詩等を執筆。	1月、上州磯部、3月、京阪浜寺、5月、富士山麓、6月、越後湯沢に旅。8月、高尾山で多磨全国大会。改造社の「新万葉集」審査に没頭、11月、選歌完了後、眼底出血のため入院。	視力回復せず、自宅療養。口述筆記をさせる。	6月、歌作に熱中、徹夜創作を続け、医師に警告される。10月、交声曲詩「海道東征」と長唄「元寇」完成。11月、歌集「夢殿」刊、妻と上州、越後を旅行。	柿生王禅寺に吟行。翌4月、杉並区阿佐ヶ谷に転居。6月、仙台で多磨東北大会後、平泉に遊ぶ。夏、円覚寺で多磨全国大会。歌集「黒檜」、詩集「新頌」刊。11月、「大日本歌人協会」解散、深く憤る。	1月、鎌倉に滞在、「白秋詩歌集」発刊。3月、「海道東征」で福岡日日新聞文化賞を受賞。式後、柳川で多磨九州大会。日向、豊後、大和を巡歴。5月、芸術院会員となる。11月、見桃寺除幕式参列。	腎臓病、糖尿病悪化、2月、入院。3月、歌論集「短歌の書」刊。4月、母の脳軟化症発作を案じて退院。病床で創作を続け、童謡集3冊ほか刊。「日本伝承童謡集成」など企画。10月、水郷柳河写真集「水の構図」序文記す。11月2日、永眠。
谷崎潤一郎「春琴抄」	中原中也「山羊の歌」	川端康成「雪国」		尾崎一雄が芥川賞を受賞	中原中也「在りし日の歌」	三好達治「艸千里」	太宰治「走れメロス」	高村光太郎「智恵子抄」	中島敦「山月記」
小田原町図書館開館			二・二六事件	昭和12～20 日中戦争		昭和14～20 第二次世界大戦	小田原市誕生	昭和16～20 アジア・太平洋戦争	

**小田原文学館**  
**生誕百三十年記念交流特別展**  
**北原白秋―詩人の見た風景―**

会期 平成二十八年一月二十三日(土)～三月十六日(水)  
 会場 小田原文学館  
 主催 小田原市立図書館  
 編集 小田原市立図書館

平成二十八年一月発行  
 ※無断転載を禁じます。